

# 自己呈示に関連した被服の消費と廃棄

池 田 善 英

## 問 題

本研究では自己呈示に関連して被服を消費する段階と、その被服を廃棄する段階との関係を検討する。

三橋（1997）によれば、現代の経済システムは大量生産・大量消費・大量廃棄型である。このシステムでは環境への負荷が高く、持続が不可能だと考えられる。適正生産・適正消費・最小限の廃棄へと転換し、持続可能なシステムを構築することが必要である。この中で個人が実践できるのは、適正消費と最小限の廃棄である。消費財の中で個人の生活に密接に関わるものとして、被服を挙げられる。

**自己呈示に関連した被服の消費** 永野（1994）は、個人が示す恒常的な被服行動の傾向を測定するため、被服行動尺度を構成した。被服行動尺度は4種類の下位尺度に分類される。流行性は、衣服の流行性に関する行動次元である。流行性の高い人ほど、流行情報に注意を向け、被服行動に流行を取り入れる。機能性は、衣服の機能性・快適性に関する行動次元である。機能性の高い人ほど、動き易さや着心地を重視する。適切性は、衣服の社会的な適切さに関する行動次元である。適切性の高い人ほど、状況にふさわしい被服を選択する。経済性は、衣服の経済性に関する行動次元である。経済性の高い人ほど、被服を購入するさい安価なものを選択する。

神山（1996）は、人が被服を着装する動機を、2種類に大別した。一つは身体の状態を方向づける、有機体の生命維持や生命増進を目指した動機である。もう一つは心や行動の状態を方向づける、自己の顕示や社会への適応を目指した動機である。前者は生理的目的、後者は心理・社会的目的と言える。心理・社会的目的の中には、人が被服を着装するさい、被服によって他者に自己の印象を与え、その印象を管理することを含んでいる。そこで被服行動は自己呈示としても捉えられる。

自己呈示と関連のあるパーソナリティとして、セルフ・モニタリングself-monitoringを挙げられる。セルフ・モニタリングとは、社会的な状況や人間関係の中で、自己を観察・規制・コントロールすることであり、その程度には個人差がある。スナイダー（1998）によれば、セルフ・モニタリングの高い人はアイデンティティを、具体的な社会状況とそれに対応する役割に、求めている。柔軟性があり、周囲に合わせて自己を変える。セルフ・モニタリングの低い人のアイデンティティは、ただ一つで、どのような状況でも変わらない。一貫性があり、性格や考えを行動に反映する。

池田（2005）は被服行動と、セルフ・モニタリングおよび被服費との関係を検討した。その結果、流行性が高い人ほど、セルフ・モニタリングが高く、被服費も高かった。経済性が高い人ほど、セルフ・モニタリングは低く、被服費も低かった。被服行動のうち自己呈示と関連があるのは、流行性と経済性であることが明らかになった。

流行性が高い人は、社会において流行している服装に、敏感である。それは具体的な社会状況の

中で、それに対応する役割に沿って、自己を規定するからだろう。状況に合わせて自己を選ぶことで、セルフ・モニタリングも高くなるのだろう。また流行に関心が高い人は、被服の消費に積極的であり、被服費も高くなるのだろう。

経済性が高い人は、被服による外見の装飾には関心が薄い。それは内部にある信条に沿って、自己を規定するからだろう。状況によらない一貫した自己像を持つことで、セルフ・モニタリングも低くなるのだろう。

**被服の廃棄** 高木（1985）は被服の廃棄基準を、嗜好的損傷、物理的損傷、着用気づかい、に分類した。嗜好的損傷は、色・柄やデザインが流行遅れとなってやぼったくなったり、飽きたり、あるいは、似合わなくなったと感じられることである。嗜好的損傷という廃棄基準は、被服が自己呈示の道具として機能しなくなったことと言える。

物理的損傷は、洗濯などによって型くずれ、縮み、色あせが起こったり、長年の着用でスリ切れ、外観が悪くなったりすることである。着用気づかいは、取り扱いや手入れが面倒であったり、他の衣服と組み合わせることが難しいことである。物理的損傷および着用気づかいという廃棄基準は、被服を自己呈示の道具として捉えているわけではない。

池田（2006）は廃棄に伴う感情尺度を構成し、廃棄に伴う感情を使用可能と後悔懸念とに分類した。そして被服の廃棄基準および不要な被服の個数との関係を検討した。

使用可能が高い人ほど、不要な被服の個数が多かった。まだ使えるものを捨てるのは、もったいなく、いけないことだと思っている人ほど、実際にものを捨てない。そのため着用することのない服でも、捨てられないのだと言える。

後悔懸念の高い人ほど嗜好的損傷を重視していた。嗜好的損傷を重視する人は被服を廃棄するにあたり、色・柄・素材・デザイン・スタイルが流行遅れになったことを基準としている。このような主観的な基準を用いるため、廃棄の判断があいまいになるのだろう。その結果、捨てなければ良かったと悔やんだり、捨てるのは心苦しいと思ったりするのだろう。

**予測** 以上から以下のように予測した。

流行性の高い人は、自己呈示に関連した被服の消費に積極的である。そのため被服費が高いだろう。必要以上に被服を購入し、不要な被服の個数も多くなるだろう。消費に際して自己呈示を重視するため、廃棄に際しても嗜好的損傷という自己呈示に関連した基準を重視するだろう。その結果、後悔懸念という感情を伴うだろう。

経済性の高い人は、自己呈示に関連した被服の消費に消極的である。そのため被服費が低いだろう。必要最小限にしか被服を購入しないため、不要な被服の個数は少なくなるだろう。消費に際して自己呈示を軽視するため、廃棄に際しても嗜好的損傷という自己呈示に関連した基準を軽視するだろう。そして後悔懸念という感情を伴わないだろう。

## 方 法

### 被験者と手続き

被験者は、千葉県内にある私立4年制大学の、女子学生69名である。2006年7月に、授業時間の一部を用いて、集団実施した。

### 使用した尺度

**被服行動** 被服行動の測定には、永野（1994）の被服行動尺度を使用した。回答方法は“全くあてはまらない”（1点）から“非常によくあてはまる”（7点）までの7件法である。全20項目からなる。被服行動尺度は4種類の下位尺度からなる。流行性、機能性、適切性、経済性である。各下

位尺度の項目の得点を合計し、各下位尺度の得点とする。

**被服の廃棄基準** 被服の廃棄基準の測定には、高木（1985）が構成した被服の廃棄基準を使用した。回答方法は“全く気にならない”（1点）から“とても気になる”（5点）までの5件法である。全30項目からなる。

**廃棄に伴う感情** 廃棄に伴う感情の測定には、池田（2006）が構成した廃棄に伴う感情の尺度を使用した。回答方法は“全くそう思わない”（1点）から“非常にそう思う”（5点）までの5件法である。全10項目からなる。

## その他の指標

**被服費** 被服費の測定には、池田（2005）に従い、以下の項目を使用した。“あなたは服装や小物に、1ヶ月あたりいくら費やしていますか。”回答方法は実際に使用している金額（円/月）を記述させた。

**不要な被服の個数** 池田（2006）に従い、本研究では不要な被服の種類と個数を、被験者に挙げさせた。整理・収納を実行している人ほど、不要な被服は廃棄していると考えられる。

## 結果と考察

### 尺度の特性

**被服行動** 被服行動の因子構造を確認するため、主成分分析を行った。第1因子の固有値は5.20、寄与率は26.0%であった。第2因子の固有値は2.87、寄与率は14.3%であった。第3因子の固有値は2.00、寄与率は10.2%であった。第4因子の固有値は1.53、寄与率は7.6%であった。第5因子の固有値は1.17、寄与率は5.8%であった。永野（1994）に則り、被服行動は4因子構造であると判断した。累積寄与率は58.22%であった。

永野（1994）に則り、下位尺度を構成した。各下位尺度の内部一貫性を確認するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。“流行性”は $\alpha = .773$ であった。“機能性”は $\alpha = .825$ であった。“適切性”は $\alpha = .687$ であった。“経済性”は $\alpha = .728$ であった。各下位尺度の内部一貫性は十分に高いと言える。そこで当該項目の合計点を算出し、各下位尺度得点とした。

**被服の廃棄基準** 被服の廃棄基準の因子構造を確認するため、主成分分析を行った。第1因子の固有値は6.20、寄与率は20.7%であった。第2因子の固有値は3.66、寄与率は12.2%であった。第3因子の固有値は2.30、寄与率は7.7%であった。第4因子の固有値は1.86、寄与率は6.2%であった。池田（2006）に則り、被服の廃棄基準は3因子構造であると判断した。累積寄与率は40.5%であった。

池田（2006）に則り、下位尺度を構成した。各下位尺度の内部一貫性を確認するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。“物理的損傷”は $\alpha = .770$ であった。“着用気づかい”は $\alpha = .800$ であった。“嗜好的損傷”は $\alpha = .761$ であった。各下位尺度の内部一貫性は十分に高いと言える。そこで当該項目の合計点を算出し、各下位尺度得点とした。

**廃棄に伴う感情** 廃棄に伴う感情尺度の因子構造を確認するため、主成分分析を行った。第1因子の固有値は3.65、寄与率は36.5%であった。第2因子の固有値は1.29、寄与率は12.9%であった。第3因子の固有値は1.08、寄与率は10.8%であった。池田（2006）に則り、廃棄に伴う感情尺度は2因子構造であると判断した。累積寄与率は49.3%であった。

池田（2006）に則り、下位尺度を構成した。各下位尺度の内部一貫性を確認するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。“使用可能”は $\alpha = .693$ であった。“後悔懸念”は $\alpha = .517$ であった。“使用可能”の内部一貫性は5項目という項目数の少なさを考慮し、実用に耐えると判断した。

“後悔懸念”の内部一貫性は低いため、結果の解釈には注意が必要である。当該項目の合計点を算出し、各下位尺度得点とした。

## その他の指標

**被服費** 1ヶ月あたりの被服費の中央値は10000円であった。

**不要な被服の個数** 不要な被服の個数の中央値は6着であった。

## 被服行動との関係

**被服行動と被服の廃棄基準との関係** 被服行動と被服の廃棄基準との関係を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した(表1)。流行性得点は嗜好的損傷得点と、有意な正の相関が認められた。流行性得点は着用気づかい得点と、有意に近い正の相関が認められた。機能性得点は嗜好的損傷得点と、有意な負の相関が認められた。経済性得点は嗜好的損傷得点と、有意な負の相関が認められた。その他に有意な相関は認められなかった。

被服を購入するに当たり流行を強く意識する人ほど、被服を処分する際にも流行に合わないことを理由としていた。これは流行性の概念と嗜好的損傷の概念から、妥当な結果であると言える。また被服を購入するに当たり流行を強く意識する人ほど、コーディネートが難しくなることも、被服を処分する基準としていた。購入に当たり流行を意識することは、自己呈示の道具として被服を使用しているのであろう。そのため自己呈示の道具として有効ではなくなった場合、廃棄を検討するのであろう。

被服を購入するに当たり機能を重視する人ほど、被服を廃棄するに際し好みに合わなくなったという基準を用いていなかった。同様に被服を購入するに当たり安価であることを重視する人ほど、被服を廃棄するに際し好みに合わなくなったという基準を用いていなかった。機能や安価さを重視する人は、被服を自己呈示という観点から見えていないのであろう。そのためその被服が自己呈示に有効かどうかという基準を、廃棄の際も用いないのであろう。

**被服行動と廃棄に伴う感情との関係** 被服行動と廃棄に伴う感情との関係を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した(表1)。経済性は使用可能得点と、有意に近い正の相関が認められた。その他に有意な相関は認められなかった。被服を購入するに当たり安価であることを重視する人にとって、被服は着られれば良いものなだろう。そこで可能なかぎり被服を使用し続けるのだろう。

**被服行動とその他の指標との関係** 被服行動とその他の指標との関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を算出した。流行性得点は被服費と、有意な正の連関が認められた。流行性得点は不要な被服の個数と、有意な正の連関が認められた。機能性得点は不要な被服の個数と、有意に近い負の連関が認められた。経済性得点は被服費と、有意な負の連関が認められた。その他に有意な連関は認められなかった。

被服を購入するに当たり流行を重視する人ほど、被服費が高く、不要な被服の個数も多かった。流行を意識する人は被服に関心が高く、被服を積極的に購入するのだろう。購入する被服の個数が多いため、整理・収納が進まず、不要な被服の個数が多くなるのだろう。

被服を購入するに当たり機能を重視する人ほど、不要な被服の個数が少なかった。機能重視の人は必要以上に被服を購入しないため、不要な被服も少ないのだろう。被服を購入するに当たり安価であることを重視する人ほど、被服費が少なかった。これは経済性の概念および被服費の概念から、妥当な結果であると言える。

表1 被服行動との相関・連関

		被服行動			
		流行性	機能性	適切性	経済性
被服の廃棄基準	物理的損傷	-.054	.068	.131	-.144
	着用気づかい	.226+	-.183	-.008	-.155
	嗜好的損傷	.534**	-.319**	-.117	-.304*
廃棄に伴う感情	使用可能	-.100	.090	-.068	.226+
	後悔懸念	.072	-.027	.048	.184
その他の指標	被服費	.342**	-.186	-.204	-.394**
	不要な被服の個数	.407**	-.259+	-.154	-.192

\*\* p<.01, \* p<.05, + p<.10.

### 被服行動以外の関係

**被服の廃棄基準と廃棄に伴う感情との関係** 被服の廃棄基準と廃棄に伴う感情との関係を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した（表2）。着用気づかい得点は後悔懸念得点と有意な正の相関が認められた。その他に有意な相関は認められなかった。

被服を廃棄する際、コーディネート難しさを基準とする人は、その被服の使い道を様々に検討するのであろう。そのため使い道の検討が漏れることを気にするのであろう。

**被服の廃棄基準とその他の指標との関係** 被服の廃棄基準とその他の指標との関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を算出した。嗜好的損傷得点と被服費との間に有意な正の連関が認められた。その他に有意な相関は認められなかった。

被服を廃棄する際、流行遅れなどの理由を重視する人は、被服を購入するに当たって流行を意識するのであろう。流行に伴って被服を次々と購入することになり、被服費も高くなるのであろう。

**廃棄に伴う感情とその他の指標との関係** 廃棄に伴う感情とその他の指標との関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を算出した。有意な連関は認められなかった。

表2 被服行動以外の相関・連関

		廃棄に伴う感情		その他の指標	
		使用可能	後悔懸念	被服費	不要な被服の個数
被服の廃棄基準	物理的損傷	.076	.162	.029	.017
	着用気づかい	.051	.280*	.197	.044
	嗜好的損傷	-.111	.007	.270*	.170
廃棄に伴う感情	使用可能			-.044	-.159
	後悔懸念			-.041	-.106

\*\* p<.01,\* p<.05,+ p<.10.

## 結 論

本研究では、自己呈示に関連した被服の消費と、その被服の廃棄との関係を検討した。

流行性の高い人は予測通り、被服費が高く、不要な被服の個数も多く、廃棄に際して嗜好的損傷という基準を重視していた。流行性の高い人ほど、自己呈示に関連した被服の消費に積極的である

ため、被服費が高いのだろう。必要以上に被服を購入するため、不要な被服の個数も多くなるのだろう。消費に際して自己呈示を重視するため、廃棄に際しても嗜好的損傷という自己呈示に関連した基準を重視するのだろう。しかし予測と異なり後悔懸念という感情は無関係であった。流行性の高い人の中には、被服を消耗品のように気軽に廃棄できる人と、廃棄に際し後悔の念を伴う人と、両方が含まれているのかも知れない。ただし後悔懸念の内部一貫性は低いため、結果の解釈には注意が必要である。

経済性の高い人は予測通り、被服費が低く、不要な被服の個数は少なく、廃棄に際して嗜好的損傷という基準を軽視していた。経済性の高い人は、自己呈示に関連した被服の消費に消極的であるため、被服費が低いのだろう。必要最小限にしか被服を購入しないため、不要な被服の個数は少なくなるのだろう。消費に際して自己呈示を軽視するため、廃棄に際しても嗜好的損傷という自己呈示に関連した基準を軽視するのだろう。しかし予測と異なり後悔懸念という感情は無関係であった。ただし後悔懸念の内部一貫性は低いため、結果の解釈には注意が必要である。

なお当然のことだが、自己呈示の方法は被服行動だけではない。そこで自己呈示動機が強くと、以下のような場合には嗜好的損傷や不要な被服の個数と関係がなくなるのであろう。例えば被服以外の自己呈示の方法に関心があったり、被服を使用するにしても流行には関わらない独自の様式を用いる場合である。このような効果を検討することが、今後の課題である。

## 引用文献

- 池田善英 2005 セルフ・モニタリングが被服行動に及ぼす効果 東京成徳短期大学紀要, 38, 11-15
- 池田善英 2006 廃棄に伴う感情とセルフ・モニタリングが被服の整理・収納に及ぼす効果 東京成徳短期大学紀要, 39, 1-6
- 神山進 1996 被服心理学の動向 高木修(編) 被服と化粧の社会心理学 北大路書房 pp.2-24
- 三橋規宏 1997 ゼロエミッションと日本経済 岩波新書
- 永野光朗 1994 被服行動尺度の作成 繊維製品消費科学, 35-9, 468-473
- 高木修 1985 衣服選択の評価基準とそれに基づくクラスター 購入, 着用, 廃棄選択における基準とその間の関連構造 関西大学社会学部紀要, 17(1), 37-66
- スナイダー M. 1998 カメレオン人間の性格 齋藤勇(監訳) 川島書店
- (Snyder, M. 1986 *Public appearances private realities: The psychology of self-Monitoring*. W.H. Freeman and company, New York, New York and Oxford.)